

革命と悪

ボードレールの 1848 年

海老根 龍介

ボードレールにおける 1848 年の、あるいはより広く第二共和政の意味を問う研究はこれまでも数多く存在したし、実証的な次元についてはすでに多くの成果が得られているが、これらの成果はボードレール像全体の理解を深める方向に必ずしも有効に生かされていないように思われる。1993 年に行われた横張誠氏との対談で阿部良雄氏は、ある時期までのボードレール研究において 1848 年の意味を問うことは、「何らかの形で革命の展望があって、それにつながるものは価値があるんだ」というイデオロギーを暗黙のうちに前提としていたことを指摘している¹。こうした左翼的立場からの研究はたしかに様々な知見を与えてはくれたが、大きな研究上の困難を必然的に伴う。二月革命から第二帝政確立にいたるまでのボードレールの姿勢に、共和主義あるいは社会主義への真剣な傾倒を認め、これを積極的に評価しようとするれば、政治の動向から距離を置き、あらゆる進歩主義思想への軽蔑を隠さなかった第二帝政期のボードレールを否定することにつながりかねないからだ。実際、革命への意志は、有効な政治的展望を失った 1850 年代以降にも、イロニーを軸に意図的な屈曲をはらんだ彼の創作を支えており、その意味でボードレールは最後まで社会参加の詩人であり続けたのだとやや強引に主張するドルフ・エーラーのような論者を除けば²、第二共和政期と第二帝政期との間のはっきりとした断絶を前提として、前者の時期に書かれたテキストの政治的意味を強調するのが、第二共和政期のボードレールを扱ったこれまでの研究の

¹ 阿部良雄、横張誠、「ボードレールの現在」、『ユリイカ』、1993 年 11 月 1 日、168 頁。

² フランス語で読めるエーラーの代表的な仕事として、Dolf Oehler, *Le Spleen contre l'oubli, juin 1848, Baudelaire, Flaubert, Heine, Herzen* (1988), traduit de l'allemand par Guy Petitdemange avec le concours de Sabine Cornelle, Payot, 1996 を挙げることができる。とりわけその第 6 章（« Folie dans le style des Lumières : sur trois poèmes en prose du *Spleen de Paris* », p. 309-334）では、「無能なガラス屋 (*Le Mauvais Vitrier*)」、「貧民を撲り倒そう！ (*Assommons les pauvres !*)」、「菓子 (*Le Gâteau*)」といった散文詩を題材に、1860 年代のボードレールがイロニーに満ちた文体的戦略を通して、1848 年の六月暴動をテキストの実践として反復していることの証明が試みられている。

大きな流れであった。このような視点を採った場合、二月革命後しばらくの間に書かれたテキストは詩人のその後とは切り離して解釈され、詩作品については、1857年（初版）および1861年（第二版）に『悪の華（*Les Fleurs du mal*）』に収録された段階で、執筆当時とは別の意味を持つようになったと見なされることになる³。左翼的立場からの研究に批判的なボードレール学者たちも、この点に関しては、方向性は逆ながら似たような見解を持つ場合が多い。1848年前後の詩人の足跡をめぐる実証的探索に強い意欲を見せる場合でも、この時期の詩人の主張や行動については、その後深められることになる思想や詩作とは無関係の、一時の気の迷いと片付ける傾向が強いのである。もっとも信頼に足るボードレール伝を著したクロード・ピショワとジャン・ジグレルは「彼が闘ったのは共和国のためではない。革命のためでさえない。反抗への根深い本能を満たすためのものだったのである⁴。」と記し、この時期の詩人のあらゆる政治的関与は、突き詰めれば、家庭を含む、既存の秩序への反抗心のみに由来すると結論づけている。

友愛か暴力か？：ボードレールと二月革命

しかし、そもそも二月革命にはじまる一連の政治的動乱に積極的に関与する第二共和政期のボードレールの姿勢は、それ以後の思想や立場と本当にそれほど相容れないものなのだろうか。エーラーのようなあからさまな階級闘争的視点は妥当性を欠くにしても、ボードレールが批評や創作、書簡において、革命への関心を晩年にいたるまで持続させたことを考えると、詩人にとって、この時期の政治的行動が自らの芸術や思想を鍛え上げていく上で、ひとつの重要な参照軸であったことを否定するのは難しい。たとえ一過性のものであれ、二月革命の理念にボードレールが心から共感したことを示す資料としてしばしば挙げられるのは、1848年の臨時政府樹立直後に友人であるシャンフルーリ、シャルル・トゥーバンとともに発刊した新聞『サリュ・ピュブリック（*Le Salut public*）』のいくつかの記事である。この新聞に掲載され

³ 第二共和政期と第二帝政期との断絶を強調する立場からの代表的な研究として、Richard Burton, *Baudelaire and the Second Republic, Writing and Revolution*, Oxford, Clarendon Press, 1991 および Pierre Laforgue, *Baudelaire dépolitiqué, quatre études sur Les Fleurs du mal*, Eurédit, 2002 が挙げられる。

⁴ Claude Pichois et Jean Ziegler, *Baudelaire* (1987), nouvelle édition, Fayard, 2005, p. 331-332.

た記事すべてがボードレールの筆になるものとは限らないし、共同執筆者として名前が掲げられた順序からすれば、シャンフルーリの方が主筆扱いされているようにも見えるが、クロード・ピショワもいうように、破格語法ともいえる表現を多く散りばめたシャンフルーリ独特の文体が認められない以上、全般にわたってボードレールの目が行き届いたものであったことはほぼ間違いないといえる⁵。中でも「民衆の美しさ (La beauté du peuple)」と題された記事は、いかにもボードレールらしい筆致で、樹立したばかりの共和国に対する熱烈な支持を表現しているという点で注目に値しよう。

三日前からパリの住人は肉体の美しさにおいて賛嘆すべきものがある。徹夜仕事や疲労は人々の身体をかがませる。しかし諸権利を再び獲得したという思いが、その身体を立ち直らせ、皆の頭を高く持ち上げさせるのだ。容貌は感激と共和国民としての誇りに輝いている。＜民衆＞が飢えに呻いていたその間に、下劣な連中はブルジョワジーを自分たちに似た姿に——全身胃袋、全身腹の姿に——作り上げようと欲していた。＜民衆＞とブルジョワジーは、フランスの身体から腐敗と不道德のこうした蛆虫どもを振り払ったのだ！美しい男たち、六尺の男たちを見たいという者は、フランスに来るがよい！自由な人間は、何人たりとも、大理石像より美しいし、額を高く掲げ、心に市民としての権利の意識を抱いていれば、どんな小人も必ず巨人に匹敵するものなのだ⁶。

「自由な人間は、何人たりとも、大理石像より美しい」というとき、この記事の書き手は、ほぼ半世紀ぶりに共和政を実現した同時代の人びとの美しさを古代美の象徴である大理石像よりも上位におくことで、19世紀の古代に対する優位を主張しようとしていると考えられる。しかし、二年前に発表された『1846年のサロン (Salon de 1846)』を特徴づけていたデカダンスの意識、そしてその意識を逆手にとつての同時代の逆説的称揚という複雑な図式はここでは姿を消し、1848年の民衆たちを古代の英雄と同じ土俵に乗せ、彼らをより完全な英雄として提示しようという意図がかなりはっきりと見て取れる。七月王政下のフランスには、腐敗し道徳を忘れているばかりでなく、ブルジョワジーを自らと同様に墮落させようという勢力が跋扈していたが、民衆とブルジョワジーは一致団結してこれら「下劣な連中」を追い払うことに成功したと記事は指摘する。重要なのは、社会情勢に関するこうした認識が、有機物の腐敗を促進する蛆虫とそれを振り払う裸の肉体という比喻によって表

⁵ プレイヤード版に付されたピショワの「解題 (Notice)」を参照。 *Œuvres complètes*, éd. Claude Pichois, Bibliothèque de la Pléiade, 2t., 1975-1976, t. II, p. 1555.

⁶ « La beauté du peuple », *ibid.*, p. 1032.

現されている点である。フランスがその輝かしい肉体を回復するというイメージは、墮落からの立ち直りを印象づけるための修辞であるだけでなく、共和国を形成する個々の人間の肉体が、堂々とした力強さを取り戻したという書き手の観察と明確な照応を成していることに注意したい。腐敗・不道德という蛆虫を振り払った末に現れるフランスの肉体と、共和国市民の輝かしく逞しい肉体が重ね合わされている以上、そこには、共和国市民一人一人、とりわけブルジョワ階級に属する市民一人一人が、それまで身にまとっていた様々な墮落の形態を脱ぎ捨てたということが、当然含意されている。『1846年のサロン』で提示された現代生活に固有の英雄性が、肉体を覆い隠す黒い衣服によって象徴される衰退を不可避の前提とし、苦悩や憂愁といった負の感情を伴っていたのに対して、美しい裸体として形象化される共和国の英雄性は、偉大な過去のそれと比較して劣るものを一切持たず、内面的にも感激と誇りという肯定的な感情によって彩られたものである。古代の英雄がいかに完全な美を体現しているように、その美は大理石の彫像と同じように外面的な形態に負うところが大きい。二月革命を成し遂げた「自由な人間」は、同様の肉体的逞しさ、美しさを持ちながら、それに見合うだけの内面的、道徳的な高潔さをも備えているのだという自負さえ、記事からは読み取ることができる。

それにしても、革命の主体をなす「自由な人間」が、このような無欠の肉体と精神を持ちうる根拠をどこに求めればよいのだろうか。この問いに答えるには、まず『サリュ・ピュブリック』の記事の書き手たちが、二月革命の道徳的完全性を繰り返し主張していることに着目する必要がある。「吉報 (Bonnes nouvelles !)」と題された記事の末尾には、「1848年の＜革命＞は絶対に1789年のそれよりも偉大なものとなるだろう、そもそもこの＜革命＞は前のそれが終わったところからはじまったのだ⁷。」という言明が読まれる。後に恐怖政治を帰結することになった大革命の轍を踏まぬよう、1848年の革命においてはキリスト教的「友愛」の精神を大切にする必要があるというのが、革命の支持者の間で当時広く流通していた考え方であるが、『サリュ・ピュブリック』もこの認識を共有している。「最初の革命と最後の革命 (La première et la dernière)」という表題を持つ記事の次の一節を見てみよう。

89年には社会は理性主義的で唯物論的であった。—— 今日、社会は完全に精神主義的でキリスト教的である。

⁷ « Bonnes nouvelles ! », *ibid.*, p. 1034.

このようなわけで 93 年は血みどろであった。—— このようなわけで、1848 年は道徳的、人間的で、慈悲深いものとなるであろう⁸。

1789 年、とりわけ 1793 年のジャコバン独裁と、1848 年の革命との違いを道徳性、人間性そして慈悲深さに求めるこの主張は、国王も含め大量の処刑者を出した恐怖政治を再び繰り返さないために、政治犯の死刑を真っ先に廃止し共和国の一体性を強調する臨時政府の立場と完全に一致している。ルイ・フィリップの七月王政は「策謀、偽善、貪欲とその他すべての下劣な情念⁹」をばら撒きながら、国民たちを圧政的に支配してきた。これら「下劣な情念」に対する憎しみを原動力に、人びとが「自由」を求めて立ち上がったのが、二月革命の実態なのである。革命は抑圧的政治に対する闘争であると同時に、蔓延している不道徳に対する闘争でもあったのであり、闘争である以上、その過程で闘士たちの肉体が強化されるのは当然の成り行きといえる。しかし革命を成し遂げ、ルイ・フィリップを追放することに成功した今、フランスには「もはや共和主義者しかいない¹⁰」。国内に敵対的な勢力が存在しない以上、そこに暴力が発生する余地はなく、共和国市民は平和な共同体の礎となるような美德と、美德の実現のために獲得した肉体美を守っていけばよい。警戒すべきは、疑心暗鬼になって臨時政府に対し人びとが反旗を翻したり、政府の側がそれを力で抑圧したりすることによって、ジャコバン独裁時代の暴力の連鎖を再び繰り返すことである。そうした事態を避けるためにも、人びとが「＜共和国＞への絶対の信頼¹¹」を共有し、「友愛」の精神を醸成させることが求められる。

七月王政打倒と臨時政府樹立の正当性を強調する以上のような『サリュ・ピュブリック』の立場は、一見かなり単純な善悪二元論を採用している印象を与えるが、細かく検討してみると実は必ずしもそうではない。たとえば、「神の懲罰 (Les châtements de Dieu)」と題された記事は、フランスを追放され世界中をさまようルイ・フィリップの様子を戯画的に描いたもので、行く先々で共和国が成立するため、決して安息の地にたどり着けない彼の運命を、抑圧的な体制を敷いてきたことに対する神の懲罰として提示している。七月王政を悪と見なす革命支持派の政治的立場だけでなく、自らのなした悪は苦痛によって贖われるべきだというボードレール独自の宗教思想の反映をここ

⁸ « La première et la dernière », *ibid.*, p. 1038.

⁹ « Trois mots sur trois gouvernements », *ibid.*, p. 1030.

¹⁰ « Les étoiles filent, et les réputations aussi », *ibid.*, p. 1029.

¹¹ « Au peuple », *ibid.*, p. 1028.

に見ることができるが、七月王政に対するこのような厳しい評価のほかに、この記事にはもう一つきわめて重要な論点が隠されているように思われる。

彼〔ルイ・フィリップ〕は全力を挙げて走る。どこかに＜共和国＞よりも先にたどり着き、そこで彼の頭を休めるために。それこそが彼の夢なのである。というのも彼にとっていまや大地のすべてが自分を包むひとつの悪夢にすぎないからだ。しかし彼が城門に触れるや否や、鐘が快活に揺れ動き始め、取り乱した彼の耳に＜共和国＞を打ち鳴らす。

ルイ・フィリップの頭は＜共和国＞を引き寄せるのだ。避雷針が＜空＞を放電させるのと同じように¹²。

二月革命をきっかけに全世界に蔓延している諸悪や抑圧、貧困から諸国が次々と解放され、新しい時代が生まれようとしていると信じる当時の共和主義者の精神を記事の筆者も共有していることは、共和化の国際的な連鎖を歓迎していることから明らかである。記事に独創性があるとすれば、こうした歴史観を寓意的に提示しながら、共和国を打ち立てるエネルギーが高揚するためには、それを抑圧する統治体制の存在が不可欠であるという認識を、書き手が明確に打ち出している点であろう。この記事において、前フランス国王が安息の地にたどり着くことができないのは、世界各地で共和国が成立し彼の受け入れを拒んでいるからではなく、逆に、前国王がいろいろな土地へと逃れることで、そこに反動としての革命運動が発生し、彼の居場所を奪っていくからだとされている。ここでのルイ・フィリップは一方で腐敗と抑圧を蔓延させる悪しき権力の象徴だが、他方で人びとのうちに自由と美徳への憧憬を醸成する役割を果たしてもいるわけである。ところで、この図式をフランス国内に適用すれば、二月革命の原動力となった自由と美徳を求める高貴な意志も、七月王政が自由と美徳を抑え込んだからこそ生まれたことになる。もし自由と美徳への意志が、抑圧に対抗する限りにおいてのみ力を持つのだとすれば、抑圧の体制を崩壊させた二月革命の後に、これを原動力として理想の共和国を建設することなど本当にできるだろうか。「友愛」の精神に則りながら、革命で獲得した自由と美徳を守っていこうというのが『サリュ・ピュブリック』の執筆者たちの表向きの立場ではあるが、彼らの主張にはこのように自らの構想を根底から覆しかねない洞察が含まれている。

実際、よく読んでみれば、『サリュ・ピュブリック』の主張のうちに、この点をめぐる矛盾を見つけ出すのは難しいことではない。暴力という悪をはび

¹² « Les châtimens de Dieu », *ibid.*, p. 1035.

こらせることなく、互いが互いを信頼しながらあるべき体制を建設すべしという提案は、革命後のフランスには「共和主義者しかいない」という先に触れた観察があつてはじめて現実性を持つわけだが、たとえば、「他のものをやっつけよう (Sifflons sur le reste)」と題された記事では、この観察が必ずしも実情に即したものでないことが示唆されている。七月王政を特徴づけていたさまざまな要素、貴族院身分、憲兵隊員、選挙人資格税額、印紙、塩税などはもう存在しないが、それでも共和国を軌道に乗せる妨げになる勢力はあるので、こうしたものに対しては攻撃していく必要がある¹³。こう主張する記事の調子は激しいもので、自由と美徳を追求しているはずの共和国が、その自由と美徳を実現するためと称して暴力という悪に手を染め、結果として「友愛」という自らに課した理念を裏切ってしまうていることを、身をもって証明する形になっているのである。革命の遂行者たちのエネルギーは、抑圧を受けている状況でこそ解放のために作用しえるが、七月王政が倒れ自らが統治者の立場に置かれてしまえば、同じエネルギーが今度は抑圧的に機能することもある。このとき彼らは悪に対抗する善として自己を規定することがもはやできないはずなのだが、にもかかわらず、共和国の「遍く覆う愛の雰囲気¹⁴」に陶醉していられるのだとすれば、それは自らの悪を見据えようとしない偽善に侵されているからにすぎないのではないだろうか。『サリュ・ピュブリック』の執筆者たちもまた、第二共和政の現在と未来を明るく展望する際には、こうした偽善を身にまとっているといえそうだが、一方で、この新聞には共和国が行使している悪をはっきりと認識し、こうした悪にもれっきとした存在理由があることについて明確な指摘を行った箇所も含まれている。臨時政府樹立直後の演劇の現状について語った次の一節を引いてみよう。

『パント (Pinto)』を上演するという話がある。フレイリッブを倒せ！と叫ぶのを聞いて三時間もの間退屈することが何の役に立つというのだろう。旧国王治下であれば非常に意味のある当てこすりだが、しかし今日では何の効果もない。

—— 市民たちは、エルマン・ス・レギューヨン女史や、バルテルミー先生や、ジャン・ジュールネ先生や、その他もろもろ、お粗末な詩句で＜共和国＞を歌う人たちが信用しないでもらいたい。

皇帝ネロは円形闘技場にすべての出来の悪い詩人たちを集め、彼らを残酷に鞭打たせるという賞賛すべき習慣を持っていた¹⁵。

¹³ « Sifflons sur le reste », *ibid.*, p. 1038.

¹⁴ « Au peuple », *ibid.*, p. 1028.

¹⁵ Article sans titre, *ibid.*, p. 1039.

『パント』とは、ネボミュセーヌ・ルメルシエ作の歴史喜劇で、フィリップ（＝フェリペ二世）が治めるスペインの支配からポルトガルを解放するための陰謀を題材としている。同じくフィリップ（＝ルイ・フィリップ）に統治された七月王政下のフランスにおいてであれば、国王打倒への呼びかけが現実的な意味を持つこともあろうが、共和政が成立してしまった状況においては、そのことにあまり価値はない。かといって、打倒すべき体制のないところで、共和国の素晴らしさを歌い上げているだけでは、理想への意志やエネルギーは力を失っていくばかりである。出来の悪い詩人たちを残酷に鞭打たせることで、古代ローマの皇帝ネロは少なくとも体制の側がエネルギーを喪失する事態を避けることには成功した¹⁶。また、このように独占的に暴力を行使することは、エネルギーを失い安逸な生き方に甘んじる駄目詩人たちを徹底的に抑圧するだけでなく、そうした抑圧への抵抗という形で新たな創造的エネルギーを生み出すことにもつながるだろう。自由と美德を希求するという点において、共和主義はたしかに悪に抗する善という面を持っているが、暴力に暴力をもって対抗するという意味では、敵と同じ悪を自らもまた行使しているのであり、共和政が成立してしまった状況でエネルギーを維持しようとするなら、自身が自由を抑圧する専制へと転化することは論理的な必然である。しかしこの抑圧への抵抗の中から新たな自由への希求が生まれてくるのだとしたら、それは必ずしも否定すべきことではない。『サリュ・ピュブリック』の立場は、一方で、人びとが「友愛」の絆で結ばれ、暴力の存在しない理想の体制として共和国を支持しながら、他方では、抑圧とそれへの反動という構図があつてはじめて理想への希求がエネルギーを獲得するというメカニズムを意識することにより、「友愛」を唱える共和国自身が実は暴力と無縁でないことをむしろ肯定的に主張するという、きわめて複雑な思考に支えられていると見ることができる。

¹⁶ ボードレールのネロに対する興味は、第二帝政以後も一貫して維持される。実際、散文詩「ある英雄的な死（*Une mort héroïque*）」は、幼馴染の詩人ルカーヌスに嫉妬した皇帝ネロと、打倒皇帝を目指して「ピソの陰謀」に参加した共和主義者ルカーヌスの対立を、明らかにモデルにしている。ボードレール、ネロ、ルカーヌスという重要な主題については、まだまだ研究の蓄積が不十分だが、さしあたり以下の論考は必読である。Graham Robb, «Baudelaire, Lucan, and *Une mort héroïque*», *Romance Notes*, Fall 1989, p. 69-75.

専制としての第二共和政：ボードレールとプルードン

ところで、1848年4月以降、ブルジョワ共和派と労働者の対立が次第に明らかになり、階級の融和を掲げた二月革命の理想が崩れるなか、幻滅を強いられていく多くの作家たちを横目に、ボードレールは、労働者による6月の武装蜂起をはじめとする政治的動乱に積極的に関与を続けるのだが、これまでの研究の文脈において、このような詩人の姿勢はしばしばプルードン主義との関連において理解されてきた。実際、ボードレールがプルードンの『貧困の哲学 (*Philosophie de la misère*)』の一節を筆写したものが残っており、筆跡その他から見ておそらく1848年のものと推定されていること¹⁷、8月にプルードンに宛てて書いた手紙の中に、「所有を守る凶暴な獣たち」というプルードン哲学を思わせる表現が含まれていることなどから考えて¹⁸、ボードレールがこの時期プルードンの著作に親しんでいたことはほぼ間違いない。また、編集秘書としてボードレールも一枚噛んでいたと考えられる新聞『国民論壇 (*La Tribune nationale*)』は、ウィリアム・バンディとジュール・ムーケという二人の先駆的研究者によってその反動的性格が強調されたが¹⁹、その後の研究によって、この新聞は社会改革に政治革命を優先させた臨時政府および憲法制定議会に対しては厳しい態度を採りつつも、民主主義的あるいは社会主義的立場から共和政を熱烈に支持していること、とりわけ労働者の権利という論点を通じては多くの点でプルードンの主張と重なり合うことも指摘されている²⁰。詩人が編集長を務めた『アンドル県の代表者 (*Le Représentant de l'Indre*)』については、その政治的保守性を否定することはな

¹⁷ 筆写の典拠はT. J. クラークの1973年の著作が明らかにした。Timothy J. Clark, *Le Bourgeois absolu, les artistes et la politique en France de 1848-1851*(1973), traduit de l'anglais par Carole Iacovella, Art Edition, 1992, p. 255-256. 年代を推定したのはビショワだが、より正確には、1846年秋から第二帝政の初めまででありうるものの、1848年という可能性がもっとも高いというのが彼の判断である。(*Œuvres complètes*, éd. cit., t. II, p. 1531.

¹⁸ この手紙には日付が付されていないが、1848年8月21日ないしは22日のものと推定されている。Correspondance, éd. Claude Pichois et Jean Ziegler, Bibliothèque de la Pléiade, 2t., 1973, t. I, p. 152.

¹⁹ Jules Mouquet et William Thomas Bandy, *Baudelaire en 1848*, Emile-Paul, 1946, p. 23-42.

²⁰ 特に以下の三つの研究を参照のこと。Clark, *op. cit.*, p. 267; Marcel Ruff, « La pensée politique et sociale de Baudelaire » dans *Littérature et société*, recueil d'études en l'honneur de Bernard Guyon, Bruges, Desclée De Brouwer, 1973, p. 68-71; Gretchen Van Slyke, « Dans l'intertexte de Baudelaire et de Proudhon: pourquoi faut-il assommer les pauvres? », *Romantisme*, n°45, 1984, p. 59-65. 前二者は『国民論壇』の民主主義的あるいは社会主義的立場を強調し、後二者はプルードン主義との親近性を明らかにしている。

るほど難しいが、文体を見ても思考の型を見てもボードレールの筆になる可能性がきわめて高い「目下の状況 (Actuellement)」と題された記事に限っていうなら、6月の蜂起に対して遺憾の意を表しながらも、その責任を臨時政府および憲法制定議会の失政に求めるという点において、プルドンのそれときわめて近い現状認識を確認できる。「この蜂起は社会主義的なものだ」という見解を示す上で実際にプルドンの名前に言及している点といい²¹、社会改革を漸進的に進める必要を強調している点といい²²、この記事の拠って立つ思想が、労働者の蜂起に社会秩序の確立を対置する保守主義よりはむしろ、労働者の権利確保を目指すプルドンの急進主義にあることを示すのは難しいことではない。

とはいえ、ボードレールがプルドンのいったい何にひかれたのかという点をより具体的に明らかにしなければ、以上のような事柄に実証的な興味を喚起する以上の意味はないだろう。プルドンにとって、二月革命の問題点とは、それを遂行した勢力が、あらゆる階級の融和の上に創出された「人民」を基盤とし、「友愛」の精神を体現する主体であると自己規定しながら、その実、ブルジョワジーの利益に基づいて専制的権力を行使する以外のことをしなかった点に求められる²³。社会と経済の仕組みを下から段階的に変えていくことが必要であるときに、政治権力を入れ替えただけで問題点がすべて解決したと主張し、その権力を絶対化することは、現実存在する階級間の対立を隠蔽し、労働者たちを追い詰めることにしかならない。自らを絶対の存在と位置づけることによって、政府は民衆の自由で自律的な自己実現を阻害し、今ある不正を固定化してしまうというのである。プルドンは暴力という手段を原則として認めないから、労働者による6月の武装蜂起を手放して称揚することはしないが、1848年7月5日付で『人民の代表 (Le Représentant du peuple)』に発表した記事において、これは「許すことのできる (excusable)」

²¹ « Actuellement » dans *Œuvres complètes*, éd. cit., t. II, p. 1062.

²² *Ibid.*, p. 1062-1063.

²³ 二月革命に対するプルドンの態度については、『革命的観念』に収められたプルドン自身の同時代テキスト群 (*Idées révolutionnaires (1848)*, introduction et notes par Hervé Trinquier, Anthony, Editions Tops / H. Trinquier, 1996) と回想録 (*Les Confessions d'un révolutionnaire (1851)*, éd. C. Bouglé et H. Moysset, *Œuvres complètes*, t. VII, Genève, Slatkine, 1982)、ピエール・オトマンによる詳細な伝記の該当部分 (Pierre Hautmann, *Proudhon*, Beauchesne, 1982, p. 731-1051)、プルドンの反国家思想を主題とした西川長夫氏の論文の、プルドンと二月革命の関係に宛てられた箇所 (西川長夫、「反国家主義の思想と論理」、河野健二編、『プルドン研究』、岩波書店、1974年、92-99頁)などを参照。

行動であったと述べ、理由を次のように説明している。殺人に喩えて考えてみると、祖国の防衛のために戦争において人を殺すことが正当であり、個人的な復讐や強盗を目的とした殺人が犯罪であるのに対して、挑発を受け正当防衛のために行われる殺人は「許すことのできる」殺人である。第二共和政府が労働者を「パンか銃弾か」というところまで追い込んだ結果としての6月の暴動は、正当とも犯罪ともいえないが、過度の抑圧が引き金になったという意味で「許すことのできる」暴動であった²⁴。こうした論の展開のうちには、自ら「人民」の代表を名乗り、現実の刷新を遂行したと主張する政府が、実際は敵として存在する階級対立を放置し、労働者たちを抑圧しているという現状認識と、抑圧に対する理のある抵抗として労働者の眼下の蜂起を容認するという立場表明が明確に示されている。

「目下の状況」で6月の蜂起に言及する際、ボードレールがこのブルードンの記事を参照した可能性はかねてより指摘されてきた²⁵。というのも、労働者の蜂起を説明するにあたって、ボードレールもまた、「小さな四角い紙片数枚でもって美德、幸福、友愛、労働を布告できる²⁶」と信じた共和政政府を糾弾し、食べる手段を失った労働者たちの叛乱が必然的であった旨を説明しようとするのだが、そこで「蜂起は正当であった、殺人が正当なのと同じく²⁷」と、蜂起と殺人を重ね合わせるブルードンと同じレトリックを用いているからだ。たしかに2月24日の革命を、歴史上ただ一度だけ出現した「もともと存在していたあらゆる意見を一つの束に結び合わせた運動²⁸」として高く評価している点など、二月革命を理念のないまがいのものの革命として批判したブルードンとのずれを感じさせる部分も少なくはない。しかし同時にボードレールは、この革命によって生まれた「友愛の神秘的な統一」を「崇高な錯覚」であったと述べており²⁹、万人の美德を結集した「真の<共和国>」は理想ではあるが、「あらゆる人間的な事柄——観念、権利、制度——は、ゆっくりと、あらゆる開花、実り、収穫と同じく、逐次的な進歩によってしか、生み出されない³⁰」以上、大切なのは、理想の実現を宣言することではなく、理想を目指して状況を少しずつ改善していくことであるとも主張して

²⁴ Proudhon, « Au rédacteur en chef du *Représentant du peuple* » dans *Idées révolutionnaires*, *op. cit.*, p. 104-105.

²⁵ Gretchen Van Slyke, *art. cit.*, p. 68.

²⁶ « Actuellement » dans *Œuvres complètes*, éd. cit., t. II, p. 1062.

²⁷ *Ibid.*

²⁸ *Ibid.*, p. 1061.

²⁹ *Ibid.*, p. 1060.

³⁰ *Ibid.*, p. 1063.

いる。人類の進歩とは、政治的革命を通して一気呵成に実現されるものではなく、社会の段階的改良を通して漸進的に進められるものだという考え方には、プルードンの影響が明らかに感じられる。

さらに、この時期のボードレールのいくつかのテキストの中に、プルードンの宗教観にきわめて近い発想が認められることにも注意する必要がある。ボードレールが確実に参照した『貧困の哲学』において、プルードンはいつている。

人間は、その生まれからして、罪に汚れているのだが、それは、悪をなすことがその本質だということではなく、むしろ悪しき存在として創造されたということの意味している。そして人間の運命は、自身のうちで己の理想を絶え間なく作り直していくことにある³¹。

人間は生まれながらにして悪であるという前提から出発する限りにおいて、プルードンには「原罪」の観念を教えの中心に据えるキリスト教と親近性を持つ面がたしかにある。だが、もし万物の創造主たる神を絶対の権威として認めてしまえば、人間は悪という性格づけから永久に逃れられないことになるだろう。プルードンはこのような宿命論を拒絶する。たとえ不十分な存在として生まれたとしても、自身の力でよりよい存在へと変貌を遂げられるのが人間だということである。自らの外部に絶対的な権威を置いた瞬間に、人間は本来備わっていたはずの自己完成能力を忘れ、今ある不本意な状況を運命として甘受するようになる。そして、この構図は政治や経済の領域をも規定して、自由な諸個人の連合に基づく自生的秩序を抑圧する専制的な政治権力や、多くの人びとを自由な経済活動の不可能な貧困状態に押しやる階級的対立が、所与の前提として受け入れられてしまうのである。「神は愚かしさであり、卑劣さである。神は偽善であり、嘘である。神は専制であり、貧困である。神とは、悪である³²。」というとき、プルードンは、政治と経済それぞれの領域で、諸個人の自由を押し潰してしまっている現行の体制を、人間の自発的成長を妨げる神的秩序と重ね合わせ、国家、資本、神という三位一体の権威と対峙するという自らの姿勢を鮮明にしている。民衆が自律的な社会秩序を形成するには、専制的政治権力とブルジョワジーを中心とした資本主義的特権階級を廃棄することが必要だが、そのためには不幸な現状を宿命とし

³¹ Proudhon, *Système des contradictions économiques, ou philosophie de la misère*, éd. C. Bouglé et H. Moysses, *Œuvres complètes*, t. I, Genève, Slatkine, 1982, p. 372.

³² *Ibid.*, p. 384.

て甘受することを人びとに強いる、神という権威からの解放がどうしても不可欠だというのである。

ボードレールとはいえば、1848年前後の政治的社会的混乱の中で制作されたと考えられる詩篇、のちに『悪の華』の「反逆 (Révolte)」の章に収められる「聖ペテロの否認 (*Le Reniement de Saint-Pierre*)」、「アベルとカイン (*Abel et Caïn*)」、「悪魔への連祷 (*Les Litanies de Satan*)」という三つの詩篇において、ブルードンと同様、神に対する反逆を社会的政治的状况と関連づけて主題化している。「聖ペテロの否認」は冒頭部から人間の苦しむ姿に逸楽を覚える神を描き出して、神とは悪であり専制であるというブルードン思想との親和性を示し³³、「アベルとカイン」は、資本からの利子、利潤を得ることで豊かな生活を享受するアベルの子孫と、食べることもままならないカインの子孫の対立を提示した上で、神を前者の味方と位置づけ、後者に神への徹底的な抗戦を呼びかけている³⁴。神とは不正で不平等な秩序の擁護者であるのみならず、その秩序のもとで苦しむ人々の呻き声に酔いしれる残忍な専制者であり、人間は自らを解放するためその支配に反旗を翻さなければならないのである。さらに、「悪魔への連祷」においては、悪魔が社会的弱者や貧者、被害者の味方として描かれているのだが、このような悪魔の位置づけは、ジョルジュ・サンドやアルフォンス・エスキロス、そして他ならぬブルードンなど、社会主義的作家たちにも共通するもので、神への反逆を抑圧的社会秩序に代わる新たな秩序の探求として意味づけるものといえる³⁵。

このように神を敵として闘うことの正当性が様々な形で語られる一方、同じ頃に書かれた詩篇「傲慢の罪 (*Châtiment de l'orgueil*)」は、神の子イエスの権威を高めるのも低めるのも自分次第であると呼んだ神学者の博士が、その自己過信のゆえに罰せられ獣同様の姿に失墜してしまう故事を題材にしている。ボードレールはこの話をドイツの「新ヘーゲル派」とブルードンに代表されるフランスの社会主義とをともに批判することを目的とするサン＝ル

³³ この点については、前掲のクラークの著書および L. B. ヒスロップの論文において、踏み込んだ検討がなされている。Clark, *op. cit.*, p. 257-259; Lois Boe Hyslop, « Baudelaire, Proudhon and *Le Reniement de Saint-Pierre* », *French Studies*, July 1976, p. 273-286.

³⁴ アントワーズ・アダムは、彼の校訂した『悪の華』の注釈において、神の秩序への反抗を謳うロマン主義的伝統を継承しつつ、その反抗を同時代の政治的社会的文脈に接続したという点に、この詩篇の新しさがあると主張している。Les *Fleurs du mal*, éd. Antoine Adam, Classiques Garnier, 1959, p. 422.

³⁵ この点については、マックス・ミルネールの以下の著作を参照。Max Milner, *Le Diable dans la littérature française de Cazotte à Baudelaire 1772-1861*, 2t., José Corti, 1960, t. II, p. 434.

ネ・タイヤンディエの記事「ドイツ無神論とフランス社会主義 (L'athéisme allemand et le socialisme français)」を読んで知ったのだが、記事の中で故事が人類の知性の深さを力説するプルードンの「傲慢」を告発するために引かれていることから、人間とは自らの理想を少しずつ現実化していく主体であるというプルードンの考え方の限界を描いた詩篇と解釈する向きもある³⁶。だがタイヤンディエもいっているように、人間を神格化してしまうドイツの「新ヘーゲル派」と違い、プルードンは人間と神との間に解決不能の終わりなき闘争を見ていた³⁷。神によって宿命として押しつけられた秩序を退け、自分自身の力で秩序を作り出すという方向づけは、神に対する単なる反抗というよりは、自らが神たらんという欲望に導かれている面がたしかにあり、実際、プルードンの著作の中にも神とは人類そのものに他ならないという意味合いの記述が散見される。しかし同時にプルードンは、絶対的な到達点を歴史の中に設定することは徹底的に拒否した。常に不完全で完成途上にあるのが人間の本質であり、人類が不動の神を自称した瞬間に、進歩は止まり不正な秩序が温存されてしまうからである³⁸。神とは人類そのものであるというとき、プルードンの念頭にあったのは、人間は自らの内にあるその時々理想を外化して神の名のもとに表象し、それを原動力に進歩を遂げてきたという認識であって、時間を超越する永遠性として定義される神に対しては、一貫して否定的な態度を保持している。プルードンにとって、歴史とは無限の神と有限の人間との永遠の抗争なのであり、そのことを踏まえて「傲慢の罪」を読んでもみると、この詩篇にプルードンの考え方に対する批判のみを認める見解は、やや単純化が過ぎるように思える。

この詩篇において、博士はその「悪魔のような傲慢³⁹」を罰せられ、往来を獣のようにうろつくことを余儀なくされるのだが、まず、ここでいう「傲慢」とは具体的にはいったい何を指しているのだろうか。

かつては生命を持ち、秩序と豪華に満ちていた伽藍、
天井の下ではあれほどの華やかさが輝いていた伽藍である、

³⁶ 阿部良雄、『シャルル・ボードレール、現代性の成立』、河出書房新社、208-209 頁。

³⁷ Saint-René Taillandier, « L'athéisme allemand et le socialisme français », *Revue des deux mondes*, 15 octobre 1848, p. 309-310. タイヤンディエの記事の解釈についてはバートンの前掲書における議論に負うところが大きい。Burton, *op. cit.*, p. 279-282.

³⁸ Proudhon, *Système des contradictions économiques, ou philosophie de la misère*, éd. cit., p. 393. プルードンの歴史観全般については、今村仁司、「プルードンの歴史観」、『プルードン研究』、前掲書、216-231 頁で的確な概観がなされている。

³⁹ *Châtiment de l'orgueil dans Œuvres complètes*, éd. cit., t. I, p. 20.

この知性の中でありとあらゆる混沌が渦巻いた⁴⁰。

博士の知性を伽藍に喩えることで、彼の打ち立てる秩序が大規模かつ精緻な体系性を有していること、そしてそれが大きな宗教的権威を獲得していたことが示唆されている。こうして堅固な秩序を自ら作り広めた挙げ句、ついには「イエスよ、ちっぽけなイエスよ⁴¹！」と叫んでしまう博士には、自分を神のごとく絶対視している面があり、獣への失墜はこの自己絶対化に対する罰であると、とりあえず考えることができる。しかし、「傲慢」という言葉が、もし自己の神格化のみを意味しているのなら、この詩篇とブルードンの思想との間にさほど大きな隔たりは認められない。人間は永遠に不完全な存在であり、したがって自ら神にはなれないことを自覚せよというのは、まさにブルードンの主張するところであったからだ。この詩篇で注目すべき点はむしろ、博士の演説が「不信心な者たち⁴²」の心をも揺さぶったとされていることであろう。博士は人びとの間で神の子イエスの権威を高めたのは自分であったと宣言する。ブルードンに従うなら、神が専制であり悪であるのは、既存の世界を絶対的なものとして受け入れさせることで、人間が自発的に秩序を作り上げていく力を抑圧してしまうからであった。もしそうだとすれば、神の権威を人間に自在に認めさせたりさせなかったりできる博士こそが、真の意味での秩序形成者であり、神よりもはるかに強力な専制的権力を行使していることになる。今ある秩序を権威づける力を神から剥奪したという点では、博士は専制に対する反逆者という面をまぎれもなく持っているが、この反逆自体、神による人間に対する専制的支配を強化しつつ引き継ぐということでもある。神が専制であり悪であるとしても、この悪に対抗するためには、自らも同じ悪をより強力に引き受けざるをえないというわけだ。

この詩篇に限っていえば、「悪魔のような傲慢」という表現に、博士の態度は悪魔の側に立つもので糾弾に値するという価値観が含意されていることは、否定できない。しかし、すでに見たように、「悪魔への連祷」では、悪魔は弱者、貧者を苦しめる既存の秩序への反逆者として祈りの対象となっているし、「聖ペテロの否認」では、博士と同じくイエスを否認した聖ペテロこそが持ち上げられている。こうした文脈を勘案して「傲慢の罪」を読み直せば、ここに神の秩序に逆らうことに対する全面的な否定を見るのは、やはり無理があるだろう。むしろこうした反抗を肯定した上でなお、その反抗の原動力も

⁴⁰ *Ibid.*, p. 21.

⁴¹ *Ibid.*, p. 20.

⁴² *Ibid.*

また悪であると指摘し、反逆者が己の不完全性を忘れて自分こそが絶対であると錯覚したときには、罰によって報いられなければならないという倫理を打ち出して見せたと考えたほうが説得的ではないだろうか。ここでのボードレールの思想は、常に不完全な存在として秩序の構築を目指すべきだという点においてプルードンのそれとかなりの程度まで共鳴しつつ、既存の秩序に対する反抗そのものの持つ犯罪性を徹底して自覚することで、より悲劇的な色合いを帯びているように思われる⁴³。

以上のことを踏まえて、1848年にはじまるボードレールの政治的活動の意味をもう一度考えてみよう。ボードレールにとって、第二共和政政府は既存の秩序を絶対化しているという意味で、神にも比すことのできる専制的性格を持っていた。二月革命はそれ自身腐敗と抑圧に満ちた七月王政への反逆であると同時に、「友愛」の原理に基づいた諸階級の融和を目指す新たな秩序形成の試みでもあって、その限りでは、専制に対置しうる理想の実現という肯定すべき方向性を有する事件と評価することもできる。だからこそボードレールをはじめとする『サリュ・ピュブリック』の執筆者たちは、革命の担い手である「自由な人間」の肉体的美しさと道徳的無謬性とをともに強調し、生まれたばかりの共和国に熱烈ともいえる賛辞を呈したのである。しかし自由と美德を追求しているはずの共和政政府も、七月王政を打倒するにあたっては暴力を行使したのだし、権力奪取後は自分に従わない勢力に対して抑圧的に振舞わざるをえないなど、決して悪を免れていたわけではない。ボードレールは、専制という悪に反抗し理想を追求しようとする限りにおいて革命を支持するが、同時に反抗も暴力を基盤としている以上は悪であり、権力を掌握すれば容易に抑圧的専制へ転化するという構造についても、透徹した認識を持っていたのである。

共和政政府を批判するに際して、ボードレールはこれもまた専制の一形態にすぎないというプルードンの主張をほぼ全面的に踏襲している。実際、「蜂起は正当であった、殺人が正当なのと同じく」というとき、詩人がこの蜂起を殺人になぞらえたプルードンを参照した可能性が高いことはすでに述べたとおりである。だがプルードンが戦場以外での殺人を積極的に評価はできないが、正当防衛であれば容認すべきだとして、労働者による暴力が持つ悪の

⁴³ 我々と立場を完全に同じくするわけではないが、他者への暴力という観点からの「傲慢の罪」の読解は、すでにジェローム・テロによって試みられている。Jérôme Thélot, *Baudelaire, violence et poésie*, Gallimard, 1993, p. 337-363. なお、この箇所以外でも、本論文はテロの議論から多大な示唆を受けている。

要素をできる限り軽減しようと努めているのに対し、ボードレールは殺人そのものが常に正当なのだと言わんばかりの表現を通じ、六月蜂起は正当でありかつ悪であるという逆説めいた論理を強引に押し通そうとする。ブルードンもボードレールも、専制に抗するためには、人間が自ら不完全であるという前提のもとに理想を追求することが不可欠だという点では一致するが、決して到達することのない理想への不断の漸進運動として人類の進歩を捉えるブルードンが、理想の追求そのものを決して悪とは見なさなかったのと異なり、ボードレールには、理想の追求はそれ自体悪であり、必然的に理想の否定を含むという独特の悲観主義が感じられる。神とは悪であり専制であるという主張は、ブルードンにとって、反逆の正当性、倫理性を保証するにすぎない。しかしボードレールは、反逆もまた悪であるという命題を乗り越えることができず、ここに罪という問題が浮上してこざるをえないのである。真に問われているのは、したがって、どうすればより良い社会が建設できるのかという純粋に政治的な問題である以上に、自由と道徳、創造と道徳との間でどのように振る舞うべきかというより普遍的な問題なのであり、このことは1848年以後しばらくのボードレールの政治的言動が、彼の創作や思想全般と決して無関係ではない所以を示しているように思われる。

倫理と行動：「聖ペテロの否認」

神が悪としての専制を代表するのであれば、人間による自由の希求は神への反逆という形をとる。他方、神への反逆がそれ自体悪を含むのであれば、自由の希求もまた罰せられずには済まされない。二月革命以降、政治的混乱へと進んで身を投じていったボードレールは、自らの行動を神学的枠組みに重ね合わせることで、この矛盾を自覚的に引き受けたのだと、ここまでの考察からいうことができるだろう。以下では、すでに挙げた詩篇「聖ペテロの否認」を題材に、専制に対する自由の希求、自由そのものの孕む悪、悪についての自覚といった問題に、この時期のボードレールがどのような解答を与えたのかを考えながら、行動と倫理をめぐる詩人の思考をもう少し詳細に検討することにしたい。いうまでもなくこの詩篇は、イエスの逮捕後、イエスと一緒にいただろうと問いつめられたペテロが「そんな人は知らない」と嘘をついたという新約聖書の記述を下敷きにしているのだが、通常は人間の心の弱さの現われと解されるこのペテロの行動に、ボードレールはある積極的

な意味を見出そうとしている。

まずは最初の二連を見てみよう。

神は自分の愛しい熾天使たちへと日々立ち上る、
この呪詛の波をいったいどうする気なのだろう？
肉と葡萄酒を貪り食った暴君しながら、
われわれのみじめな冒瀆を心地よく聞いて眠っている。

殉教者や受刑者のすすり泣く声は
心酔させる交響楽なのだろう、
その逸楽のためにこれだけの血が流されても、
〈神々〉はまだ少しも満足してはいないのだから⁴⁴。

神は悪であり専制であるというブルードンの命題が表現されていることは一読して理解されよう。神は肉と葡萄酒で腹を満たし眠り込む君主に喩えられている。「肉」と「葡萄酒」という二つの語は、刑に処されたイエスの肉体と「契約の血」を連想させ、次連の「殉教者」や「受刑者」のイメージへと直結するが、一方で「～を貪り食った (goinfré de)」や「～を心地よく聞いて眠っている (s'endormir au doux bruit de)」といった表現は、カリカチュアの題材にでもなりそうな、権力者の怠惰で腹のふくれた様子を髣髴とさせる⁴⁵。苦痛のすすり泣きを楽しむ神の恐ろしさ、残虐さを強調し、「殉教者」、「受刑者」を神による不当な支配の被害者として描き出すことで、瀆神的な言葉を吐く「われわれ」の一人である詩人をこうした被害者たちの味方と位置づける一方、残忍非道な神と卑俗で飽食の君主とのイメージの混交によって、詩人たちの反抗が宗教的形而上学的次元と世俗的政治的次元とにまたがるものであることをも印象づけている。第一行目に「神 (Dieu)」と単数で書かれていること、詩篇全体の内容が明らかにキリスト教的神を問題としていることなどからして、八行目の「神々 (Les Dieux)」という複数形は明らかにおかしい。実際、『悪の花』初版以降のヴァージョンでは「天 (Les Cieux)」と書きかえられており、クロード・ピショワのように、冒瀆のかどで非難された際

⁴⁴ *Le Reniement de Saint Pierre dans Œuvres complètes*, éd. cit., t. I, p. 121. ただし議論の性質上、以下で引用し検討するのは、ピショワが付したヴァリエントと照会しながら筆者が再構成した、1851 年末から 1852 年の初頭にテオフィル・ゴーチエに送った手書き原稿のテキストである。

⁴⁵ すでに松本勤氏がここでの神の姿に「ドーミエがカリカチュアしてもよさそうな、腹の出た権力者の趣」を見て取っている。多田道太郎編『シャルル・ボードレール「悪の花」註釈』、京都大学人文科学研究所、全二巻、1986 年、下巻、1269 頁。

に、異教の神々のことだと言い逃れる余地を残すべきではないかという、ボードレールの迷いの反映と考えてよいだろう⁴⁶。

第三連以降は十字架に掛けられたイエスの描写がしばらく続く。少し長い引用する。

ああイエスよ、オリーブの園を思い出せ！
卑しい刑吏どもが君の生きた肉に釘を打ち込む
その音を<天>で聞いて笑っていた者に向かって
君はひざまずいて馬鹿正直に祈っていた、

衛兵隊や賄い方のならず者たちが
君の神聖な身体に唾吐きかけるのを目にしたときも、
無限の人間らしさが宿って生きる君の頭蓋に
茨の棘が突き刺さるのを感じたときも。

砕かれた身体のぞつとするような重みで
君の両腕が強く引っ張られて伸びたとき、君の血と
君の汗が蒼ざめていく額から流れたとき、
万人の前で君が標的のように晒し者にされたとき、

君は夢見ていたのだろうか、あれほどまでに輝かしく美しかったあの日々を、
永遠の約束を果たすために君がやってきた日、
おとなしい牝驢馬の上に王のように腰掛けて、
花や小枝が散りまかれた道を君が踏んでいった日を、

希望と勇気を胸いっぱいにくらませ、
あれら卑しい商人たちを君が力の限り鞭打った日、
君がついに主となった日を？<後悔>は
槍よりも深く君の腹に突き刺さりはしなかったか⁴⁷？

第三連は第一連、第二連の内容を受け、イエスもまた非情の神に苦しめられる「殉教者」、「受刑者」の一人であることを明示している。詩人は釘で十字架に磔つけられるイエスの痛みを笑って聞く神の残忍さを示した上で、それほど目の遭いながらも神に忠誠を誓い祈り続けるイエスの愚かしさを責めているのである。続く第四連で、イエスは神ばかりでなく、衛兵隊や賄い方といった人間たちからも辱めを与えられ、さらに第五連において、十字

⁴⁶ *Œuvres complètes*, éd. cit., t. I, p. 1079.

⁴⁷ *Le Reniement de Saint Pierre*, *ibid.*, p. 121-122.

架の上で万人の目の前に標的よろしく晒されながら、次第に生命力を失っていくことになるのだが、以上の流れからすれば、イエスのこの惨めな姿は残酷な仕打ちに抗わないゆえの自業自得ということになるだろう。

だがそもそもイエスはどのような経緯でこのような屈辱的な仕打ちを受けることになったのだろうか。第六連、第七連を読むと、過去の一時期、イエスが支配者として自ら秩序を作り上げようとしていたことが分かる。この箇所は、子驢馬に乗ったイエスが木の枝を敷いた道を通って、人びとの王としてエルサレムに迎え入れられる新約聖書の場面を下敷きにしたものだが、従う者たちに「主の名によって来られる方」と呼ばれているからも分かるように、聖書において彼は、神がこの世に正しき秩序を作るために遣わした人物であるかのごとく描かれている⁴⁸。ボードレールにこのようなイエスの救世主的性格を際立たせる意図があったことは、道に木の枝だけでなく花も撒かれていたと細部を改変したり、「王のように腰掛ける (trôner)」、「主となる (être maître)」といった支配者としての属性を強調する表現を用いたりして、王として振舞うイエスの輝かしさをより効果的に引き立てている点、第四連で「神聖な身体」と訳した *divinité* と「人間らしさ」と訳した *humanité* という二つの語に韻を踏ませ、神性を付与された人間というイエスの二重性を印象づけている点から明らかであろう。しかしイエスがその名において秩序を打ち立てようと試みた神とは、結局のところ、人間たちの苦しみ呻く声に酔う残酷非道の専制者にすぎなかった。実際、かつての栄光を夢見るイエス自身が今や犠牲者として断末魔の苦痛に耐えているのである。第七連に見られる〈後悔〉という語には、人間たちを騙して残酷な神のお先棒を担いでしまったことを悔いるイエスの感情、あるいはそれを人間の真の解放へと繋げて欲しいと願う詩人の期待が、きわめて自然に読み取れる。

しかし一方で、イエスの〈後悔〉の由ってくるところは、人間に不幸をもたらす悪しき神に協力してしまったということにとどまらない面があるようにも思われる。第七連の「卑しい商人を力の限り鞭打つ」という記述では、エルサレム入城の直後、神殿から商人を追い出したというこれも聖書に記されたエピソードに則りつつも、イエスの行為に「力の限り鞭で打つ」という、原典には見られない要素が付加されて、サディスティックな暴力を行使したこ

⁴⁸ 『マタイ』、21・1-11；『マルコ』、11・1-11；『ルカ』、19・28-38；『ヨハネ』、12・12-19。聖書は日本聖書協会による新共同訳を用い、以下に引用する場合もこの日本語訳にしたがうが、併せてルメトル・ド・サシーによるフランス語訳も参照した。

とが強調されている⁴⁹。たとえば詩篇「ワレトワガ身ヲ罰スル者（L'Héautontimoroumenos）」で、恋人に対する攻撃がいつの間にか自身への攻撃へと変わっていったように⁵⁰、ボードレールにおいては、他者への肉体的暴力が「悪を自覚する」という内省的プロセスを通して、自己自身を罰する内面における暴力へとしばしば変換されることが知られている⁵¹。だとするなら、イエスの〈後悔〉も、単に悪しき支配者の手先となったことに向けられたものではなく、自分自身が直接的に他者への暴力を働いたことにも向けられていると読めないだろうか。イエスの苦痛に迫いうちをかける槍は、一方で今やイエスも犠牲者の一人である神の残虐性のしるしであるが、他方では自らの罪に対してイエス自身が行う糾弾の象徴でもあるというわけだ。だが、イエスの〈後悔〉の由来にこのような二重性を認めれば、この詩全体が訴えるところもまた複雑なものにならざるをえない。最終連において詩人は、過去のあやまちに縛られて身動きの取れなくなったイエスを見限って、彼を否認した聖ペテロに神の専制との戦いの希望を託すことになる。けれども、もしこの詩に暴力そのものを悪と見なす思想が含まれているとすれば、不可避免的に暴力を伴う戦いを詩人が手放して称揚するとは考えにくい。悪しき秩序への反抗と、反抗が必然的に内包する悪という問題について、詩人はどのような向き合い方をしているのか。最終連を引こう。

いかにも、この私はといえば、心安らかに出て行くだろう、
行動が夢の姉妹でないような世界からは。
願わくは、剣を用いて、剣によって滅びたいものだ！

⁴⁹ 『マタイ』、21・12-17；『マルコ』、11・15-19；『ルカ』、19・45-48。『ヨハネ』にはこの場面はない。聖書の記述にしたがえば、イエスは商人の使う両替台や腰掛けを引っくり返すという暴力をふるいはするが、そこに商人自体を「力の限り鞭打つ」というような激しさは見られない。この詩の従来の解釈において、支配者としてのイエスの暴力性については軽視される傾向にあったが、近年出版された『悪の華』の入門書の中で、パトリック・ラバルトはこの点の重要性を強調している。Patrick Labarthe, Jacques-Philippe Saint-Gérard et Isabelle Turcan, *Les Fleurs du mal, Baudelaire, analyse littéraire et étude de la langue*, Armand Colin, 2002, p. 79-80.

⁵⁰ L'Héautontimorouménos dans *Œuvres complètes*, éd. cit. t. I, p. 78-79.

⁵¹ ボードレールにおけるこのような心理的メカニズムに関しては、詩人のサディズムの分析を通して、「彼の反逆の爆発がいかなるものであろうと、ニーチェ主義者としてよりも偏執的自己懲罰者として見たほうが、その姿を正しく捉えられるだろう（p. 71）」との結論に達したジョルジュ・ブランの考察が、なによりも参照されるべきである。Georges Blin, *Le Sadisme de Baudelaire*, José Corti, 1948, p. 13-72.

聖ペテロはイエスを否認した、よくやった⁵²！

この詩篇の文脈で考える限り、「夢」という語を、十字架の上でイエスが見た「夢」、自ら王たらんとした栄光の日々の思い出と切り離して考えることはできないだろう。人間のための正しい秩序を確立しようと立ち上がったイエスだが、神による支配の悲惨な現実を前にした今、そのような過去は頭の中で回想して楽しむ対象、すなわち単なる「夢」にすぎなくなり、あらためて「行動」に訴える意欲は完全に潰えてしまった。最初の二行からは、そのことに対する深い失望が、詩人に「行動」への信頼を失わせ、この世からの撤退を決意させている様子が、ごく自然に読み取れる。しかし、その直後に、神に屈するイエスを裏切った聖ペトロを称賛し、再び「行動」への希望を口にしているところを見ると、この決意を完全に真に受けるわけにはいかない⁵³。聖書によれば、かつてイエスは弟子たちに対して「わたしが来たのは地上に平和をもたらすためだ、と思ってはならない。平和ではなく、剣をもたらすために来たのだ。」と明言し、彼への帰依を邪魔するものとはたとえ家族であっても戦わなければならないと説いていた⁵⁴。だが自らが逮捕される際、イエスは捕えにきた者のひとりの耳を剣で切り落とした弟子に対し、「剣をさやに納めなさい。剣を取る者は皆、剣で滅びる。」といって諫めたという⁵⁵。ここには正しい秩序をもたらすために暴力という手段を積極的に用いる立場から、いかなる目的のためであれ暴力を否定する立場、暴力そのものを悪と見なす立場への大きな変更が認められる。ここに詩篇「聖ペトロの否認」固有の文脈を重ね合わせれば、かつて神の名において暴力を正当化したイエスが、神こそが人間の不幸の原因であることが判明した今になって、暴力という手段を手放し、悪しき神の秩序を温存しようとしている構図が浮かび上がるだろう。聖ペテロを弱き人間の代表という聖書的な位置づけから引き離し、イエスに代わってあるべき秩序を打ち立てる解放者として捉え直す詩人には、この世の不正を放置するこのような構図に挑戦する意志が明らかに感じられる。

⁵² *Le Reniement de Saint Pierre dans Œuvres complètes*, éd. cit., t. I, p. 122.

⁵³ この最終連について、これまでのボードレール研究が、詩人の全作品中でももっとも有名な最初の二行に注目するあまり、それと相反するかのような内容を含む最後の二行へ十分な関心を払ってこなかったとするピエール・ラフォールグの批判は正当である。Laforgue, *op. cit.*, p. 67.

⁵⁴ 『マタイ』、10・34-39。

⁵⁵ このイエスの言葉は『マタイ』のみに記されている (26・51-52)。また『ヨハネ』は敵の耳をそぎ落とした弟子を聖ペテロであると特定している (18・10)。

もつとも、ここで、変節後のイエスの教えそのものが否定されているわけではない点にも注意する必要があるだろう。詩人は戦いを望みながら、自らの滅亡を最初から予感することで、「剣を取る者は皆、剣によって滅びる」という命題そのものは受け入れてしまっている。新たな秩序を打ち立てるために今ある秩序の破壊が必要であり、破壊のためには暴力という悪の行使が不可避である以上、悪に対する反抗者の行き着く先は、結局のところ、敵と同じ悪を自らも犯すことでしかない。とするなら、神に代わる新たな秩序を暴力をもって打ち立てても、暴力を行使された側から、自分と同じような反抗の主体がいずれ立ち上がってくるのは必然であろう。新しい秩序を目指す行為は、暴力という悪を内包している限りにおいて、新たな暴力によって報いられ頓挫するほかない。「行動」しないことが既にある悪を放置することを意味し、「行動」に打って出れば自らが悪となることが避けられない以上、残された選択肢は、「行動」には必ず悪が伴い、それゆえ目的が成就することはないと自覚しつつ、それでも「行動」に身を投じることだけなのだ。「聖ペテロの否認」はたしかに「行動」に挫折したイエスに引導を渡し、より徹底した「行動」へと自らを駆り立てる詩人の意志を表現した詩篇であるけれど、同時に、この意志が「行動」を新たな理想的な体制を打ち立てるための手段としてではなく、悪と知りつつなす悪として捉え直す強靱な倫理に支えられていることを見逃してはならない。

結論

ここまで我々は、1848 年以後、政治に積極的に関与したボードレールの目指したものが、理想とする社会体制の創出ではなく、今ある悪に対抗するために自ら悪を犯すという逆説的倫理の実践であったことを見てきた。そのことを理解した今、第二共和政期のボードレールと第二帝政期のボードレール、両者の関係をどのように理解すればよいだろうか。現実に関与したのか否かという点を重視すれば、そこに横たわる距離はたしかに限りなく大きい。だが一方で、1852 年に友人に「脱政治化」を宣言した後も⁵⁶、ボードレ

⁵⁶ 1852 年 3 月 5 日のナルシス・アンセル宛書簡において、ボードレールはナポレオン三世のクーデタにふれて、「12 月 2 日が私を肉体的に脱政治化しました。」(傍点原文)と記している。(Correspondance, éd. cit, t. I, p. 188.) ただし、この一文の解釈は研究者の間で必ずしも一致を見ておらず、政治へのコミットメントに対するボードレールの全面的放棄と解する、広く受け入れられた見方がある一方で、ロス・チェンバースや

ールが48年にはじまる政治的動乱について、あるいはより一般的に革命的情熱について執拗に説明を試みていることは、まぎれもない事実である。自らの1848年体験を語った、『赤裸の心 (*Mon cœur mis à nu*)』の次の二つの箇所を考えてみよう。

1848年における私の陶醉。

この陶醉はいかなる性質のものであったのか？

復讐への嗜好。取り壊しの、自然的な快楽。

[…]

5月15日。—またしても破壊への嗜好。正当な嗜好だ、もし自然的なものはすべて正当であるとするなら。

[…]

<6月>の惨劇。民衆の狂気とブルジョワの狂気。犯罪への自然的な嗜好⁵⁷。

1848年が面白かったとするなら、各人がそこに空中楼阁に似た理想郷を描いていたからにすぎない。

1848年は度を越した<愚かしさ>そのものによってのみ魅力的だったのである⁵⁸。

ここでボードレールは、自らの行動を含め1848年の騒動を、たしかに「愚行」として認識している。「各人がそこに空中楼阁に似た理想郷を描いていた」と述べる以上、革命を目指して闘った個人個人がなんらかの政治的構想を持っていたことは認めているが、そのような構想の根底には既存の体制をとにかく破壊してしまおうという暴力的な衝動があったというのである。しかし、だからといって、ボードレールが騒動を全面的に否定しているのではないことは、破壊衝動は人間の本性に由来する自然的なものであり、「自然的なものはすべて正当である」と見なす限り一概に否定はできないと言明されている点

ビエール・ラフォルグなど、ここで退けられているのはあくまでも肉体的、直接的な政治行動であって、書くという行為を通しての間接的な政治性、反体制的なコミットメントは常に詩人の念頭を去らなかつたと考える論者もある。Ross Chambers, « Baudelaire's Street Poetry », *Nineteenth-Century French Studies*, Summer 1985, p. 256 ; Pierre Laforgue, « Les Contemplations, *Les Fleurs du mal*, ou le romantisme des années 1850 » dans *Lire Les Fleurs du mal*, actes des journées d'étude organisées à Paris 7 (10 et 11 octobre 2002), textes réunis par José-Luis Diaz, *Chaiers textuels*, n°25, 2002, p. 223, note 43 および *Baudelaire dépolitiqué*, op. cit., p. 9-11.

⁵⁷ *Mon cœur mis à nu* dans *Fusées, Mon cœur mis à nu, La Belgique déshabillée*, éd. André Guyaux, coll. Folio, 1985, p. 92.

⁵⁸ *Ibid.*, p. 93.

から明らかである。この文章が書かれた 1860 年前後以降のボードレールにとって、「自然」がきわめて重要な概念であったことは、多くのテキストでこの語がイタリックで強調されていることにも見て取れるが（上の引用においても自然的なという形容詞の最初の使用はイタリックでなされている）、この概念の位置づけについての詩人の態度は両義的だ⁵⁹。1860 年ごろに執筆されたと考えられる（発表は 63 年）「現代生活の画家（Le peintre de la vie moderne）」において、あらゆる自然的なものが悪である以上、人間は自然を制御し変形していかなければならないと説く一方⁶⁰、ラクロの『危険な関係』についての覚書では、フランス革命期に悪のエネルギーが高まったことに、羨望の念を表明している⁶¹。こうした一見矛盾する態度は、悪である自然を嫌悪し人工的にこれ乗り越えようとする意志と、偽善の支配する近代社会において弱まる一方であるエネルギーの源として、積極的に悪に身を任せたいという衝動との間を揺れ動くボードレールの葛藤を証し立てている。

第二帝政期以降のボードレールが何より敵視したのが、自然も人間も生まれながらにして善であり、より良い状態へと変化していくことを運命づけられているという進歩礼賛の思想であったことはよく知られている⁶²。自然も人間もそれ自体として善きもので、その上、さらに優れた状態への変化を不断に続けているのだとすれば、個々の人間は何もせずこの変化に身を任せていればよいことになる。しかし、たとえば詩篇「旅（Le Voyage）」が示すように、世界のどこへ行っても、昨日も今日も明日も、原罪に覆われた光景に変化はないというカトリック的見解を、当時のボードレールは持っていた⁶³。科学や産業がそれなりの発展を遂げているのは事実にしても、それを根拠に人類そのものの進歩を主張する立場は厳しく退けられる。個々の人間がそれぞれの創造性に訴えて抵抗を試みない限り、世界は悪に満ちた耐え難い存在であり続けるのであって、自然の善性を盲信して抵抗への意志を捨ててしまった 19 世紀の人間は、以前と比べて退歩こそすれ進歩しているなどとは到底いえないのである。だが、それならば、悪に覆われた外の世界と対決し、自らの力でこれを作り変えようとするれば、人間は悪に打ち克つことができるだ

⁵⁹ ボードレールの「自然」に対する態度全般を扱った研究書として、Felix Leakey, *Baudelaire and Nature*, Manchester University Press, 1969 がある。

⁶⁰ « Le peintre de la vie moderne » dans *Œuvres complètes*, éd. cit., t. II, p. 715-716.

⁶¹ « [Notes sur *Les Liaisons dangereuses*] », *ibid.*, p. 68.

⁶² ボードレールと同時代の進歩思想一般との関係については、2005 年 1 月にパリ第四大学に提出した筆者の博士論文、*Baudelaire et le progrès*, thèse de doctorat présentée et soutenue à l'Université de Paris IV, 2005 を参照いただきたい。

⁶³ *Le Voyage* dans *Œuvres complètes*, éd. cit., t. I, p. 133.

ろうか。この点についてボードレールの答えははっきりと否であり、人類は世界をより良い形に変えていくことができると主張する多くの人たちと同步歩調をとった1848年の時点でさえ、詩人がその企ての実現性を信じていなかったことは、本稿のこれまでの記述から明らかであろう。自然を善きものと見なし、これを無条件に受け入れる傾向の強い同時代の風潮に対し、ボードレールは、自然は本来的に悪であり、個々の人間が自分の力でこれに抵抗する必要があることを強調するが、その一方で、新たな世界の創造は現秩序を破壊する快楽と不可分であることを明晰に意識していた。そしてこの暴力的な快楽を自然的と性格づけることで、ボードレールは、自然の悪を乗り越えるために発揮する人間の創造力もまた自然に由来すること、人間が自然に、そして悪に打ち克つことなど決してできないことを、はっきりと指摘したのである。ボードレールにおける自然と人工の対立は、したがって複雑な様相を呈することになる。悪である世界を乗り越えるために発揮すべき創造的エネルギーもまた悪である以上、対立は既存の現実と人間による創造との間だけにではなく、悪に無自覚な創造と自覚的なそれとの間にも認められなければならないからだ。自然の対立項としての人工の本質は、創造のために悪のエネルギーに身を任せながら、それを統御する意識、「悪の中の意識⁶⁴」が機能する余地を確保するところにあるというわけである。『衣を剥がれたベルギー (*La Belgique déshabillée*)』には、「共和主義精神」は我々のすべてが血管の中に持っているものだと言った一節がある⁶⁵。専制的秩序を打ち破るためのエネルギーが、人間に生来的に備わった自然の力、つまりは悪だとすれば、革命において糾弾すべきは、運動が愚かしく破壊的であるという事実そのものではなく、新たに理想の社会を築こうと運動に身を投じる者たちが、自ら不可避免的に抱え込んでしまう悪に無自覚である点に存することになる。

それにしても、1852年に政治の現場から撤退することを宣言したのちも、自らの政治体験の意味を問い続け、革命について思考を深めていったボードレールの執着は、奇妙といえど奇妙である。理想の体制の構築を目指す実践が、結局のところ、挫折を帰結するほかない以上、純政治的観点から見て、革命が無意味で愚かしい熱狂に過ぎないことは明白なのだから。しかし、たとえば、天才的俳優ファンシウルの専制的君主との関係を描いた散文詩「あ

⁶⁴ 『悪の華』所収の詩篇「救われえぬもの (*L'irrémédiable*)」で用いられている表現である。 *Œuvres complètes*, éd. cit., t. I, p. 80.

⁶⁵ *La Belgique déshabillée* dans *Fusées, Mon cœur mis à nu, La Belgique déshabillée*, éd. cit., p. 317-318.

る英雄的な死」において、俳優が参与した政治的陰謀と舞台での天才的熱演とがともに君主への反抗として提示されていることから分かるように、ボードレールには革命と芸術的創造を相同的なものとして捉える傾向がある。革命が専制という悪しき政治体制への抵抗であるならば、芸術は自然という悪しき外的秩序への抵抗と考えられるのは見やすい道理だが、「ある英雄的な死」では、こうした類似に加えて、演技で魅了することで、それまで君主に支配されていた観客を、自分の支配下におくファンシウルの政治性がほのめかされている。ボードレールにとって、芸術的創造とは、外的な自然を破壊し自らの作り出す世界に置き換えることであると同時に、その世界を共有させるという形で享受者たちを専制的に支配することでもあったのである。しかし、芸術が自然と享受者に対する二重の暴力性に支えられているとしても、今ある秩序が悪しきものであるならば、反抗としての正当性を認めないわけにはいかない。問題は自らが不可避的に行使している暴力性に芸術家がどれだけ自覚的であるかであり、その点に関する限り、革命と芸術にはまったく同じ倫理が要請されていると考えることができる。

現実の政治から身を引いていた晩年の詩人が、革命について語り続けた理由の少なくとも一つが、自らの携わる芸術的創造のメカニズムを表現するための格好の題材であったことにあるのは間違いないだろう。才能ある個人による自己完結的行為と思われがちな芸術的創造が、自然や他者に対する暴力と無縁でないことを示すためには、暴力と暴力のぶつかり合いに他ならない革命になぞらえることが何よりも効果的であった。純粹に政治的観点からすれば、非生産的というしかない詩人の 1848 年の体験も、彼が終生携わった芸術行為の寓意として捉え返せば、美と倫理との葛藤というボードレールに特徴的な問題を考えるための、重要な参照軸たりえるのだ。第二共和政期のボードレールの政治的行動を、その後の作品と関係の薄い一過性のものとして片付ける風潮は、したがって誤っている。ナポレオン三世による統治体制の確立をきっかけに、ボードレールが革命の実践的価値を政治的次元で見限ったとしても、自らの行動を通して獲得した革命のメカニズムについての洞察が、芸術という別次元の実践のうちに隠された暴力への感受性を高め、芸術への批判を包含する芸術という新たな創造へと詩人を駆り立てていった道筋は見まがいようがないからである。二月革命直後の政治的行動をその後の作品全体との関連において検討することは、ボードレールの創造が、他者や自然に対する暴力性とその悪に向き合う倫理とのせめぎ合いをその本質とすることを理解する上で、きわめて有効な出発点を形作るように思われる。